

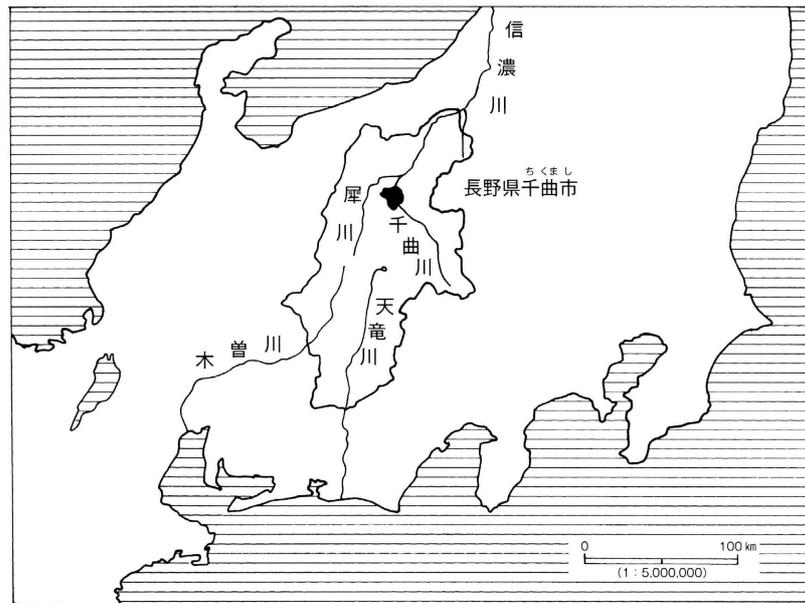
長野県千曲市

屋代遺跡群 馬口遺跡 8

屋代高等学校附属中学校施設整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012

千曲市教育委員会



千曲市の位置

例 言

- 1 本書は、長野県屋代高等学校長 高橋康人と、千曲市長 近藤清一郎との埋蔵文化財発掘調査業務委託契約に基づき、平成22年度に実施した屋代高等学校附属中学校施設整備に伴う屋代遺跡群馬口遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 整理調査及び報告書の刊行は、平成23年度に実施した。
- 3 調査は、千曲市教育委員会生涯学習文化課が主体となり、文化財係が担当した。
- 4 本書の執筆・編集は翠川が行った。
- 5 本書掲載の遺構・遺物の縮尺は下記を基本とした。

竪穴住居跡 = 1 : 60	カマド = 1 : 40	土層断面図 = 1 : 40
土器実測図 = 1 : 4	石器実測図 = 1 : 2・1 : 3	
- 6 本書掲載の焼土・カマド粘土・砂層・遺構構築土層には、網掛け等のスクリーントーンを用いて表現した。
- 7 本文中の遺物実測図の表現方法は、下記のとおりである。

土 師 器断面 = 	黒色処理 =
須 恵 器断面 = 	
灰釉陶器断面 = 	
- 8 遺構図の海拔標高は各遺構ごとに統一し、縮尺尺度上に表記することを基本とした。
- 9 本文中の図版の座標値及び方位は、平面直角座標系第Ⅷ系で示している。
- 10 土層の色調は、1990年度版『新版標準土色帳』に基づいて示した。
- 11 調査によって出土した遺物のほか、実測図及び写真等発掘調査に関するすべての資料は、千曲市教育委員会で保管している。

目 次

例言

目次

I 調査の概要	1
II 調査に至る経過及び調査方法	2
馬口遺跡発掘調査日誌	3
III 遺跡の環境	6
IV 遺構と遺物	7
1. グラウンド地点	7
2. テニスコート地点	12
3. テニスコート地点出土遺物 (第16図)	16
V 総括	21

写真図版 (PL)

報告書抄録

I 調査の概要

長野県屋代高等学校附属中学校施設整備に伴う屋代遺跡群馬口遺跡埋蔵文化財発掘調査について、
箇条書きにして概要を記すものとする。

- 1 調査遺跡名 屋代遺跡群 馬口遺跡 (千曲市遺跡台帳 No.31-4)
調査遺跡記号 BGU
- 2 所在地 千曲市大字屋代1,000番地
- 3 土地所有者 長野県知事 村井 仁
- 4 調査原因 平成22年度屋代高等学校附属中学校施設整備事業
- 5 事業委託者 長野県屋代高等学校長 高橋康人
- 6 調査の内容 発掘調査 1,200㎡ (立会調査含)
- 7 調査期間 発掘調査 平成22年10月1日～平成22年12月17日
平成23年度に一部立会調査 2回
整理調査 平成23年7月1日～平成24年3月30日
- 8 調査費用 6,012,000円 (現場調査) 全額事業者負担
1,400,000円 (整理調査) 同上
- 9 調査受託者 千曲市長 近藤清一郎
調査主体者 千曲市教育委員会
調査担当者 千曲市教育委員会生涯学習文化課文化財係 翠川泰弘

千曲市教育委員会事務局

平成22年度

教育長	安西嗣宜
教育部長	高松雄一
生涯学習文化課長	小泉義和
文化財係長	矢島宏雄
文化財係	翠川泰弘
	寺島孝典

平成23年度

教育長	安西嗣宜 (23.12.3まで)
	吉川弘義 (23.12.5から)
教育部長	小池洋一
生涯学習文化課長	武田清志
文化財係長	矢島宏雄
文化財係	翠川泰弘
	寺島孝典
	久保紀明

発掘調査参加者	碓田美文・大久保一太郎・折笠州男・北村哲男・近藤 孝 関 英幸・高野幸男・滝沢洋一・林 重訓
整理調査参加者	大裕美代子・田中富子
10 種 別・時 期	集落跡 古墳時代～中世
11 検 出 遺 構	奈良時代住居跡 1 軒・平安時代水田跡・畦畔 5 条・溝跡 8 条 中世井戸跡 1 基
12 出 土 遺 物	土器片・石器 遺物コンテナ 4 箱

Ⅱ 調査に至る経過及び調査方法

平成22年6月14日、事業主体である長野県教育委員会高校教育課から屋代高等学校敷地内において屋代高等学校附属中学校の施設整備による工事を予定したため、当該地籍内での埋蔵文化財についての照会があった。

事業予定地は屋代遺跡群馬口遺跡に相当し、工事により遺跡が破壊される恐れがあることから、長野県教育委員会高校教育課、同文化財・生涯学習課、千曲市教育委員会生涯学習文化課と埋蔵文化財の保護協議を実施した。協議の結果、千曲市教育委員会で発掘調査を担当することとなった。

文化財保護法第94条に基づき、平成22年7月30日に発掘通知の提出があり、発掘調査を実施する運びとなった。

平成22年9月27日、長野県屋代高等学校長 高橋康人と千曲市長 近藤清一郎との間で発掘調査の委託契約を締結した。同年10月1日から発掘調査を開始し、12月17日に現場における発掘調査作業を終了した。

調査費用が減額となったため、平成23年3月10日に変更契約書を締結し、平成23年3月25日、概要報告書の提出をもって平成22年度分の調査を完了した。

整理調査は平成23年7月1日委託契約を締結し、平成24年3月30日調査報告書を刊行して全ての業務を完了した。

発掘調査は、現グラウンド地点と同テニスコート地点の2箇所が対象となった。過去における調査方針では、各地点ごとに調査成果をまとめていることから、本調査もその調査方針を踏襲し、グラウンド地点とテニスコート地点に分割して遺構を命名して記録保存を行った。

調査遺跡記号については、過去の調査記号付与方法にしたがってBaGuchiのBGを頭に、末尾に調査履歴順にアルファベット記号順のUを付し、BGUとした。

報告書名については、刊行履歴によると途中よりローマ数字を末尾に付してきているが、本書では、年度報告もあわせて算用数字に置き換えて『馬口遺跡8』を報告書名とした。

調査における記録写真は、35mmカメラによるモノクロ・カラースライドフィルム、デジタルカメラによる撮影を併行して行っている。

馬口遺跡発掘調査日誌

【平成22年】

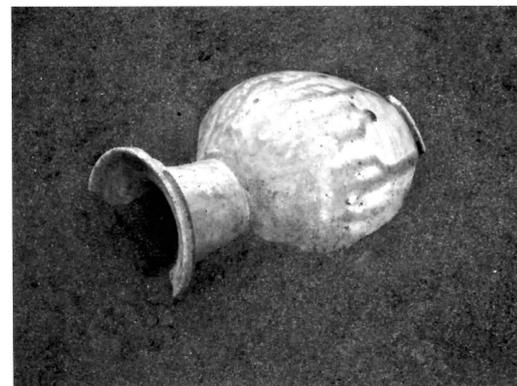
- 10月1日(金) 発掘機材搬入。
グラウンド トレンチ表土削平開始
- 10月2日(月) テニスコート 表土削平開始
- 10月5日(火) 作業員による調査開始
- 10月6日(水) グラウンド トレンチ遺構検出作業開始
- 10月8日(金) テニスコート 手作業による整備開始
グラウンドと併行して作業実施
- 10月12日(火) 基準点測量実施
- 10月13日(水) テニスコート 完形の灰釉陶器出土
- 10月14日(木) グラウンド 住居跡検出
- 10月15日(金) グラウンド 住居跡掘下げ開始
- 10月21日(木) 住居跡旧カマド掘下げ
- 10月22日(金) カマド・住居掘り方掘下げ
- 10月26日(火) グラウンド 旧河道セクション実測
- 10月27日(水) グラウンド 旧河道・基本層序実測
- 10月29日(金) グラウンド 溝跡掘下げ
住居跡実測
- 11月2日(火) グラウンド 溝跡実測・全体清掃・写真撮影・グラウンド部作業完了
- 11月4日(木) 全員でテニスコート地区の作業に移動
- 11月8日(月) グラウンド トレンチ埋戻し
- 11月9日(火) テニスコート基準点測量
- 11月10日(水) 水田面精査・渡り廊下部トレンチ深掘
- 11月11日(木) 調査区北壁セクション写真撮影
- 11月12日(金) 中央部畦畔精査
- 11月15日(月) 水田面北東部遺物取上げ
- 11月17日(水) 南西部大畦畔上遺物取上げ
- 11月18日(木) 1号溝跡内粘土ブロック精査
- 11月25日(木) 畦畔土層分析
- 11月30日(火) 各畦畔切断トレンチ掘削
- 12月1日(水) 1～4号畦畔遺物取上げ
- 12月2日(木) 1・2号畦畔切断トレンチ完掘
- 12月7日(火) 校舎屋上より写真撮影
- 12月8日(水) 1号大畦畔下溝跡掘下げ・埋戻開始
- 12月15日(水) 中央部深掘トレンチを完掘・実測
- 12月16日(木) 溝跡実測・埋戻
- 12月17日(金) 機材搬出を行い現場作業終了



グラウンド地点 トレンチ掘削状況



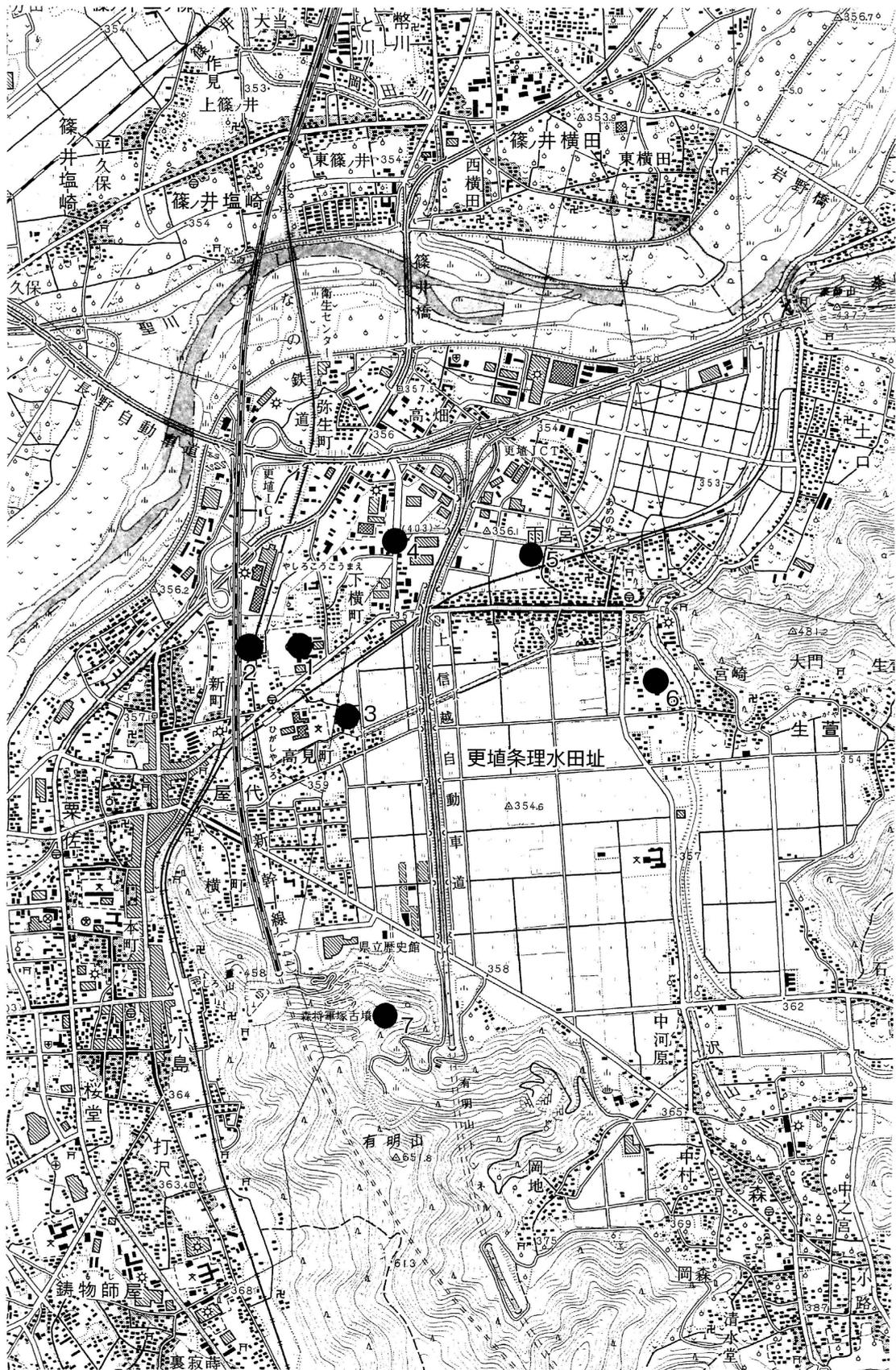
グラウンド地点 トレンチ完掘状況



1号畦畔上 灰釉陶器出土状況

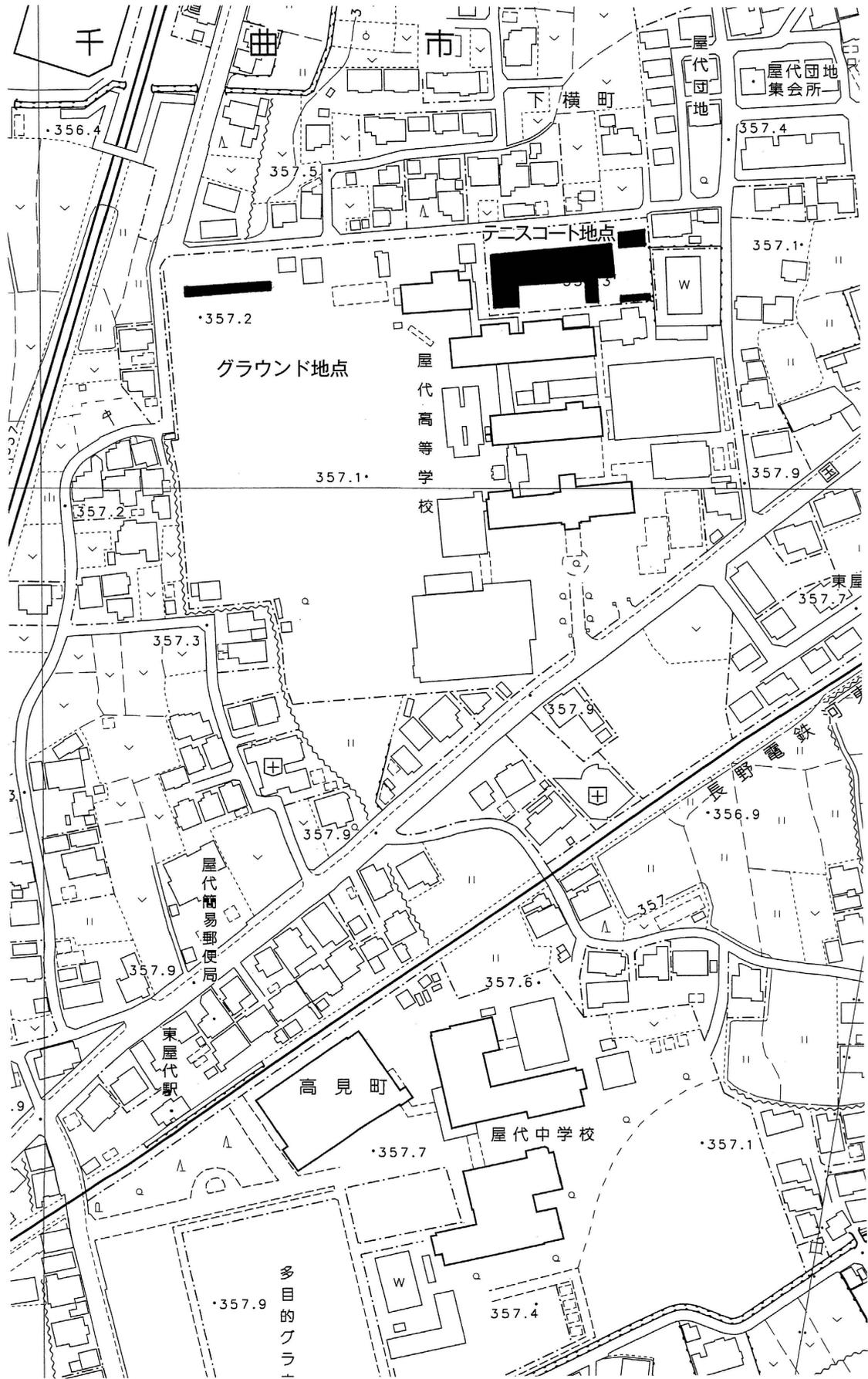


テニスコート地点 埋戻状況

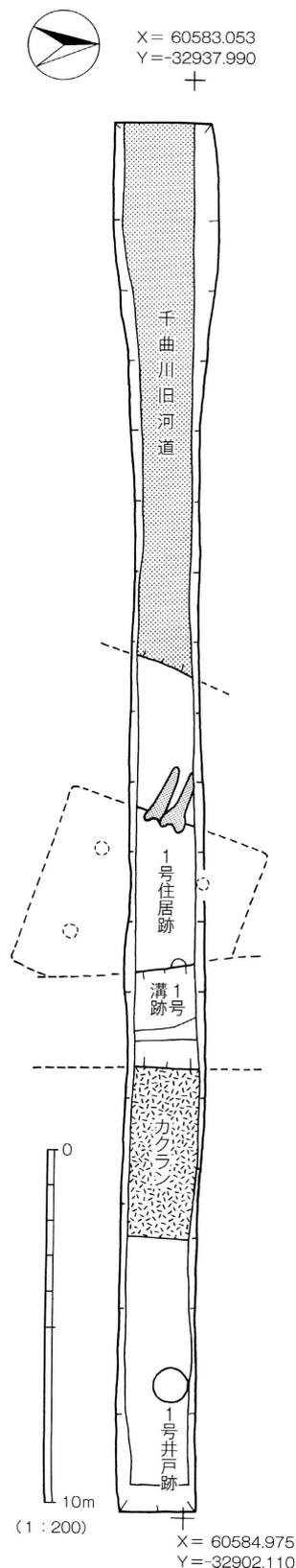


1. 馬口遺跡 2. 地之目遺跡 3. 大塚遺跡 4. 城之内遺跡 (1 : 25,000)
 5. 灰塚遺跡 6. 生仁遺跡 7. 森將軍塚古墳

第1図 遺跡位置図



第2図 発掘調査対象区 1 : 2,500 (千曲市都市計画基本図より)



第3図 グラウンド地点トレンチ遺構全体図

記号	地点	調査年	調査原因	面積 m ²	報告書名	刊行年
BGU	—	2010	付属中学校校舎建設等	1,200	馬口遺跡8	2012
BGT	—	1997	便所建設	30	H9年度報告(VII)	2000
BGS	—	1991	部室・倉庫建設	100	馬口遺跡VI	1992
BGR	—	1989	管理混合教室棟	1,000	馬口遺跡V	1991
BGQ	Q地点	1988	合宿所建設	115	馬口遺跡IV	1989
BGP	P地点	1987	プール・自転車置場	1,400	馬口遺跡III	1988
BGO	O地点	1986	体育館・格技室・部室	2,400	馬口遺跡II	1987
BGM	M・N地点	1985	校舎改築・浄化槽建設	900	馬口遺跡	1986
—	L地点	1982	クラブ棟建設	—	—	—
MGK	K地点	1978	校舎建設	340	屋代馬口K	1978
—	J地点	1976	昇降口建設	—	—	—
—	I地点	1970	ゴミすて場建設	—	—	—
—	C・D地点	1965	条理的地割調査	—	—	—
—	A地点	1933	プール建設	—	—	—

馬口遺跡発掘調査履歴

Ⅲ 遺跡の環境

馬口遺跡は、千曲川屈曲部東岸に形成された広大な自然堤防上に営まれた集落遺跡で、その南側には後背湿地が広がっている。更埴条里水田址は、千曲川の氾濫により形成された後背湿地を利用して営まれた平安時代、またはそれより古い時代の埋没水田跡が検出される地域として周知されている。

昭和36年から実施された学術調査により条理的地割によって区画された水田跡が埋没していることが判明し、また、水田面を被覆している砂層が仁和4(888)年に起こった千曲川の大洪水によりもたらされた土砂であることが後の研究などで明らかとなり、この砂層直下に検出される水田跡が9世紀代の水田跡として認識されるようになった。

馬口遺跡は、昭和8年、プール建設に際して長野県内でも稀な大形の緑釉陶器を出土した遺跡として歴史的重要性が認識された。その後、昭和40年代から平成時代の初期にかけて校内各施設の建設等に伴い十数回の発掘調査が実施され、住居群や鉄製羽釜の出土等多数の成果が確認されている。その成果により、当遺跡は奈良時代から古代にかけての集落跡と水田跡が複合した重要性の高い遺跡であることが判明している。

引用・参考文献

- 長野県教育委員会 1968「地下に発見された更埴市条里遺構の研究」
- 更埴市教育委員会 1987「馬口遺跡II」長野県屋代高等学校体育館建設に伴う発掘調査 他

IV 遺構と遺物

1. グラウンド地点

現グラウンド地点は、テニスコートの新設が計画されたため、工事における掘削深度、テニスコートの上部構造検討のためトレンチ調査を実施した。トレンチは、グラウンド北西端部分を東西方向に、幅2m×長さ43mの規模で掘り下げを行った。

地表下約60cmまでは、グラウンド造成土・攪拌土が堆積し、その下方に旧水田（現代の水田）を形成した土層が確認され、さらにその下方に中世以降の遺構が検出された。トレンチ東部域の丘陵部は砂層の堆積が確認されず、旧水田下に中世遺構と古代遺構が同一面で検出された。住居跡1棟・井戸跡1基・溝跡1条及び旧河道が検出された。遺構は、丘状の高台となるトレンチ東部域において集中して検出された。西部では、千曲川旧河道が検出されており、西方に移行するにしたがって深度を増し、最西端では、地表下3mを計測する。この地点で字名が変わり、旧河道部側は字名が地之目となり、それに冠しているため遺跡名も地之目遺跡となる。地形の旧状が大きく変化しており、それに合わせて字名を付していたことが窺える。

1号住居跡

遺構（第4・5図）

トレンチ中央部に検出された。煙道の長いカマドを持つ住居であり、トレンチ調査であるため全容は確認できていないが壁・床面の状況から規格性が高くしっかりとした設計により構築された住居であることが推察される。

カマドは2基検出されている。南側のカマドが古期のカマドであり、廃絶後埋め立てられ、北側に新しいカマドが構築されている。新期のカマドはN-77°-Wの主軸を持ち、旧カマドに比べ若干北よりの方位軸を持つ。カマドには長胴甕の胴下半部を再利用した支脚が用いられ、煙道にも同甕の胴部破片が再利用されていた。カマドは潰れていたため、構築材粘土は流出しており、ほとんど原型を留めていなかった。火床は明確に確認されている。旧カマドはN-70°-Wの主軸方位を持つ。新旧のカマドは規模等あまり変化がなく、新規カマドは、旧カマドの機能性をそのまま映して構築したと考えられる。

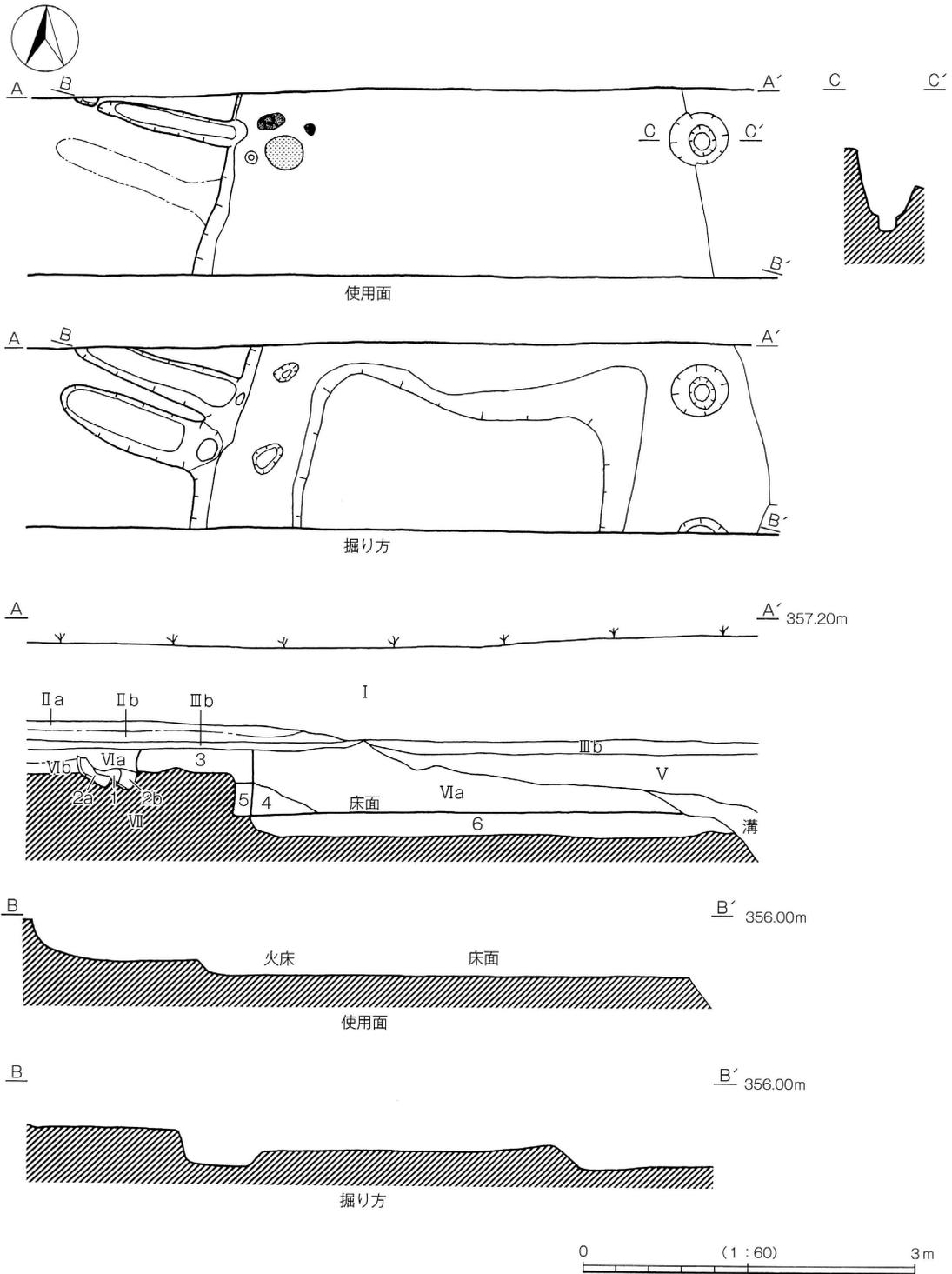
柱穴は1基確認されている。柱の底面部分は非常に硬く締まっており、上部の荷重が加わっていたことが確認できた。本柱穴の配置・規模からすると規格性を持った4本柱構造の住居であったことが想定されると共に、住居構造も考慮すると7mクラスの比較的規模の大きな住居であることが推察される。

遺物は床面上、カマド周辺に集中して検出された。また、古期のカマドの掘り方ないし住居の掘り方内からも構築土に混在して比較的まとまって出土している。

本住居跡は、住居構造・形態・出土遺物より奈良時代の所産と推察される。

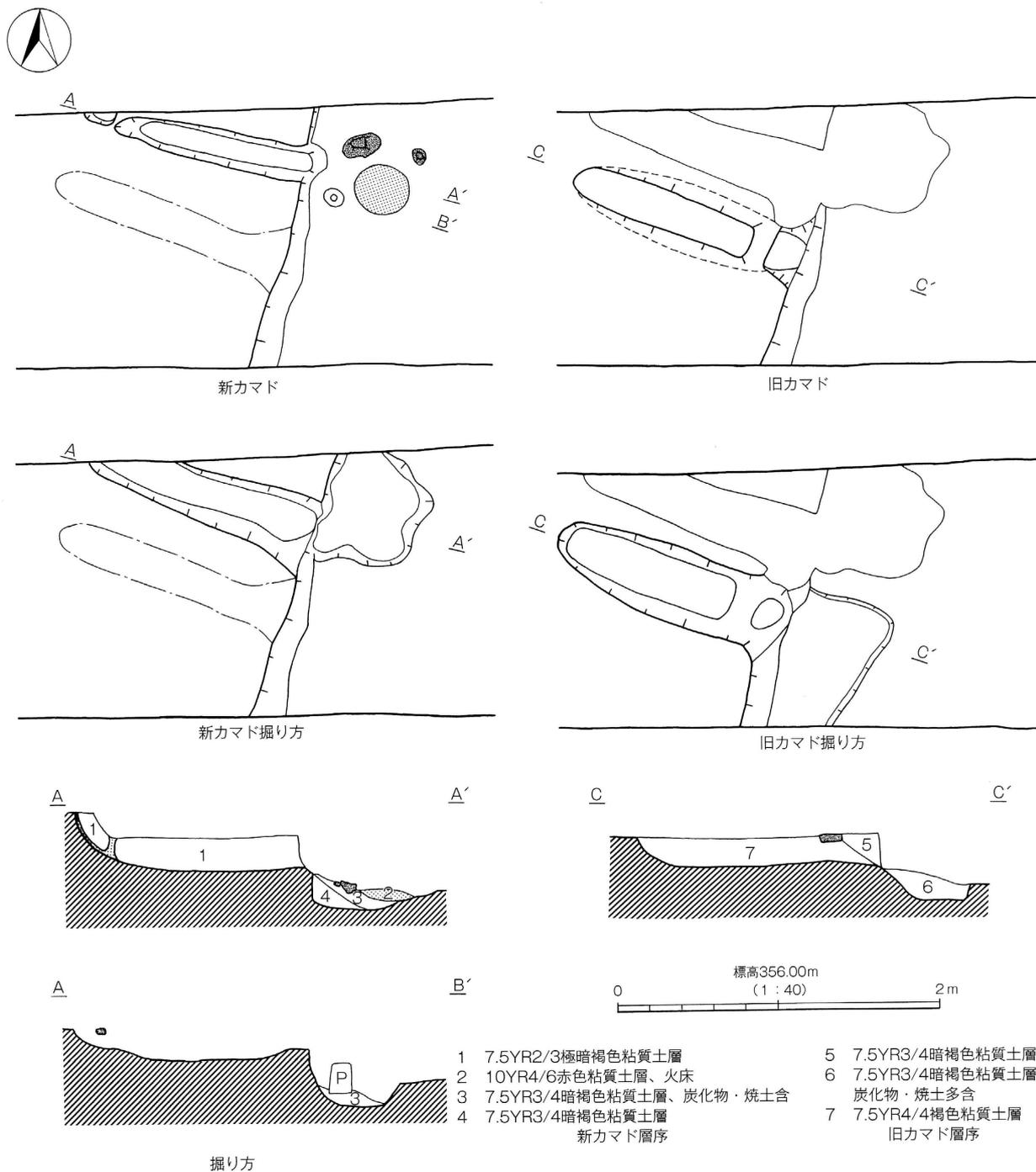
遺物（第6図）

コンテナ2箱分と比較的遺物の出土量が多い。長胴甕、甌等が出土している。住居中央部には、長胴甕1が倒れて潰れた状態で検出された。本跡のなかでは、一番薄手で丁寧な作りを持つ長胴甕であ



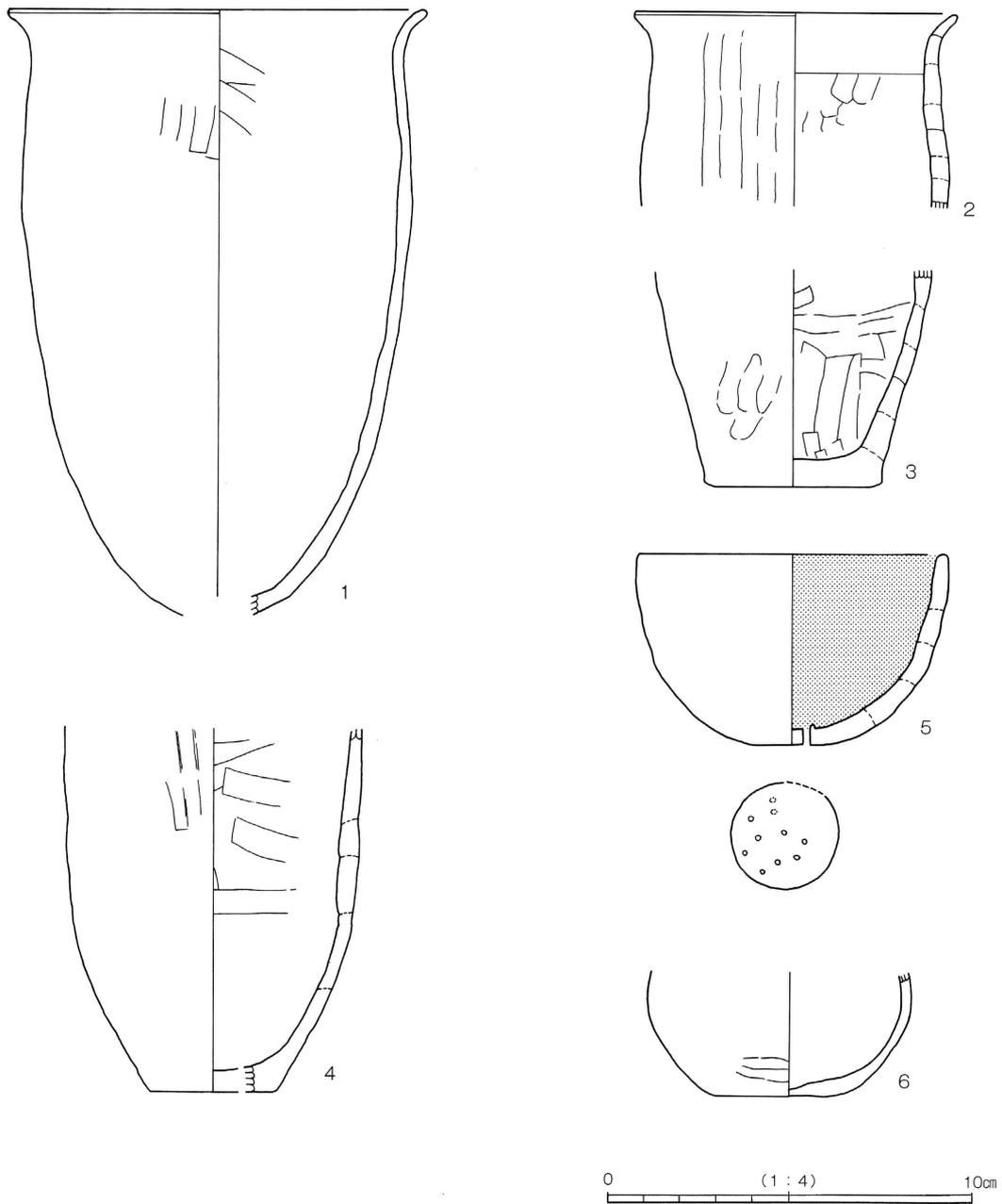
- | | | | |
|-----------|-----------------------------|-----|-------------------------|
| I | 造成土及び攪拌土層 | 1 | 10YR3/2黒褐色粘質土層 (カマド構築土) |
| II a | 7.5YR4/6褐色粘質土層、鉄分多含 (旧水田床土) | 2 a | 10YR3/4暗褐色粘質土層 (カマド構築土) |
| II b | 7.5YR4/3暗褐色粘質土層、鉄分少 (旧水田床土) | 2 b | 10YR3/3暗褐色粘質土層 (カマド構築土) |
| III b | 7.5YR4/1褐色粘質土層、鉄分土粒多含 | 3 | 10YR3/2黒褐色粘質土層 |
| IV a~IV d | 砂層は検出されない | 4 | 10YR3/4暗褐色粘質土層 |
| V | 7.5YR4/2灰褐色粘質土層 (攪拌土) | 5 | 10YR3/4暗褐色粘質土層 (ローム混在) |
| VI a | 10YR3/3暗褐色粘質土層 (遺物包含層) | 6 | 10YR3/3暗褐色粘質土層 (床埋土) |
| VI b | 10YR4/4褐色粘質土層 | | |
| VII | 10YR4/2灰黄褐色粘質土層 (地山) | | |

第4図 1号住居跡遺構実測図



第5図 1号住居跡カマド実測図

る。2は旧カマド、埋土内から出土した長胴甕である。不均一な器壁であり、内面は指頭痕が顕著に残る荒い作りである。長胴甕の胴下半部3は、新カマドの支脚として用いられていたものであり、2・3は同一個体である可能性がある。4は、カマド・住居掘り方内の構築土に混在して出土した長胴甕である。外面は比較的丁寧な作りであるが、厚手であり内部の成形は荒い。5は、ぼつりとして作りが荒く、輪積み跡が残る厚手の内黒甕である。2～4の長胴甕は埋土内からの出土であり、住居廃絶時に機能していないため、5の甕は、1の長胴甕とセットになって使用されていたと考えられる。即ち、1・5は住居廃絶時直前に使用されていたセットであり、廃絶年代を示す資料となる。6

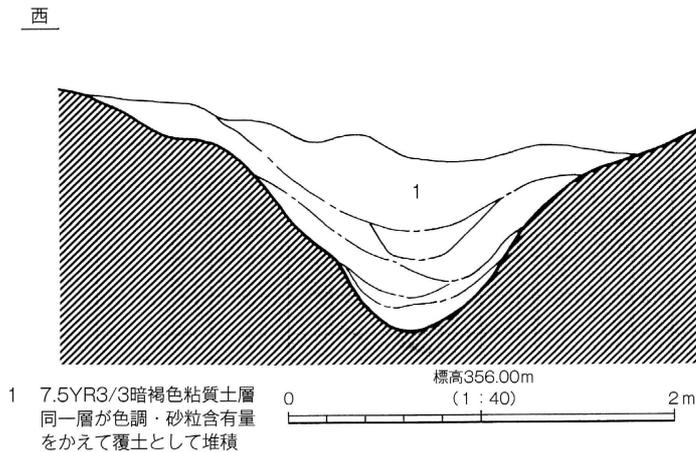


第6図 1号住居跡出土土器実測図

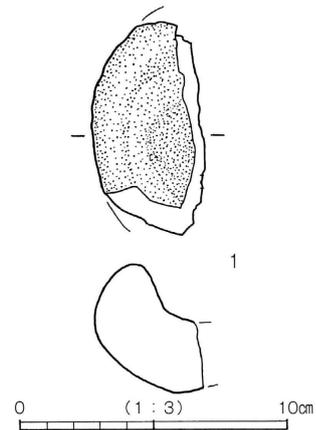
は椀状の器形をもつと推察される土師器である。器壁が均一ではなく、特に底部中央はヘラにより削られ周囲に比べ極薄の作りとなる。厚ぼったくなくなってしまった底面を削ろうとして、削り過ぎてしまった印象を受ける。調整も粗く、全体的に粗雑な作りである。破片焼成を受けているため、住居廃絶時には使用されていなかった土器であることが窺える。

1号溝跡（第7・8図）

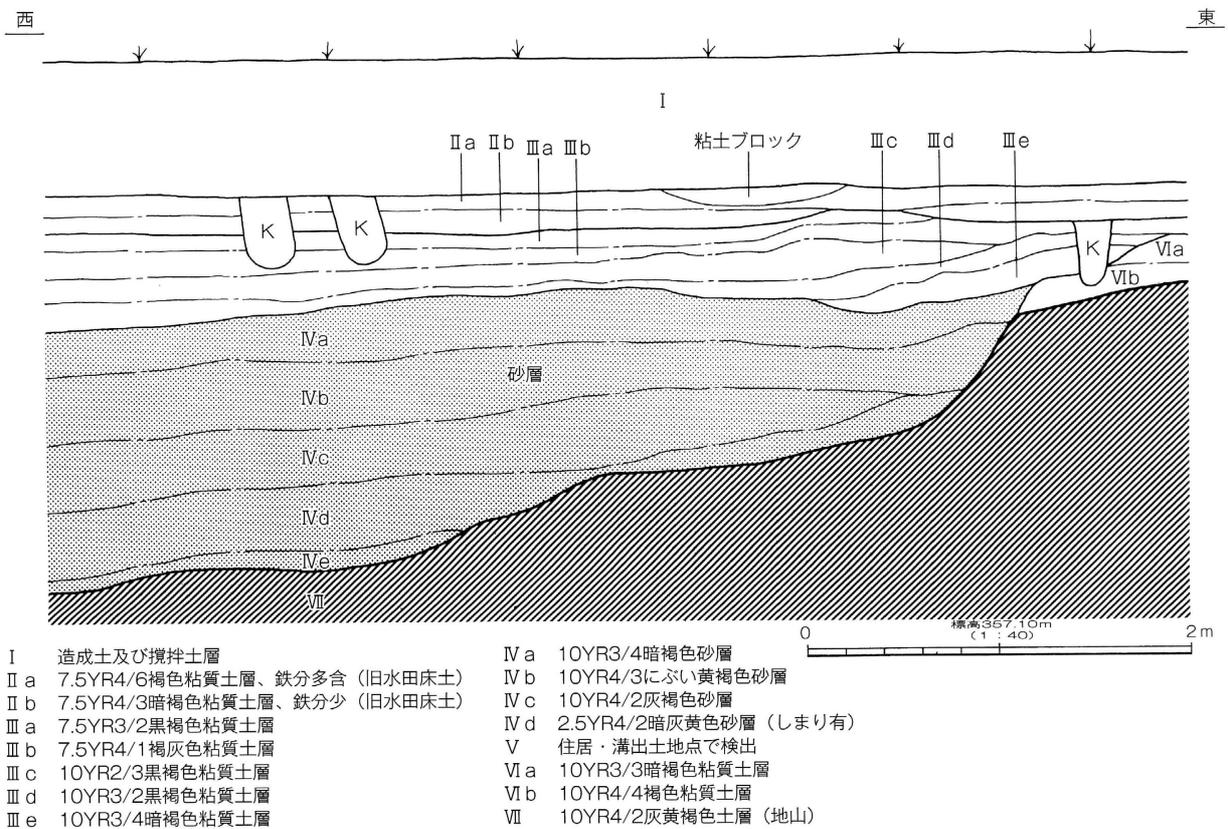
1号住居の東部に検出され、住居の東壁部を破壊して構築している。最底面は鉄分が堆積して硬化しており、長時間溝として機能していたことが窺がえる。底面は部分的に丸味をおびるが全体的には梯形の断面形状をしている。遺物は、青磁細片と軽石製の凹石（10-1）が検出されている。中世より新しい時期の遺物が検出されず中世起源の遺物が検出されることから、溝の所産期は中世と推察される。しっかりとした掘り込みを持つことから、区画性を持つ溝と捉えておきたい。



第7図 1号溝跡土層断面図（トレンチ北壁部）



第8図 1号溝跡出土石器
実測図



第9図 トレンチ西端旧河道部分土層断面図（トレンチ北壁側）

1号井戸跡（第3図）

直径95cmの正円形の井戸であり、壁は垂直に掘り込まれている。深度150cmほど掘り下げたが、壁崩落の危険性があるので完掘は行っていない。遺物の出土は少なく、土師質土器の細片が検出されていることから、その時期を所産期と推察しておきたい。

2. テニスコート地点

本地点は、中学生棟の校舎新築部分にあたり、校舎部分の全面の調査を実施した。テニスコート地点は、テニスコート造成土あるいは旧水田床土（現代水田）の下位全面に砂層が堆積し、砂層を取り除くと全面に水田跡が検出された。砂層下には、灰褐色粘土層が全面を被覆しており、水田の床土を形成している。この粘土を用いて畦畔を造り、水田を区画している。

1号畦畔（第10・11・13・16図）

1号畦畔は、幅6mを測る大規模な畦畔である。主軸は $N-84^{\circ}-E$ である。畦畔上からは、完形の灰釉陶器長頸壺（16-3）、内黒坏（16-2）が出土している。畦畔を構築している粘土は、水田床土と同類の粘土であるが、水田床土ほどの緻密さはなく、粘性度も低い。

また、大畦畔の下層からは、上部の畦畔に平行して2・3号溝跡が確認されている。2号・3号溝は $N-84^{\circ}-E$ の主軸方位を持って並走している。整然とした掘り込みを持ち、側面・底面は鉄分が集積しかなり堅緻な状態で検出されている。この状況から、長い時間溝が使用されたことが窺え、使用后、その真上に大畦畔を構築したことが理解できる。2条の溝は、構造・使用痕跡が近似すると共に並走することから同時に構築し、使用していたことが窺える。水田面からの遺物の出土量は極めて寡少であるが、溝内からは、混在して破片資料が比較的多く検出されている。

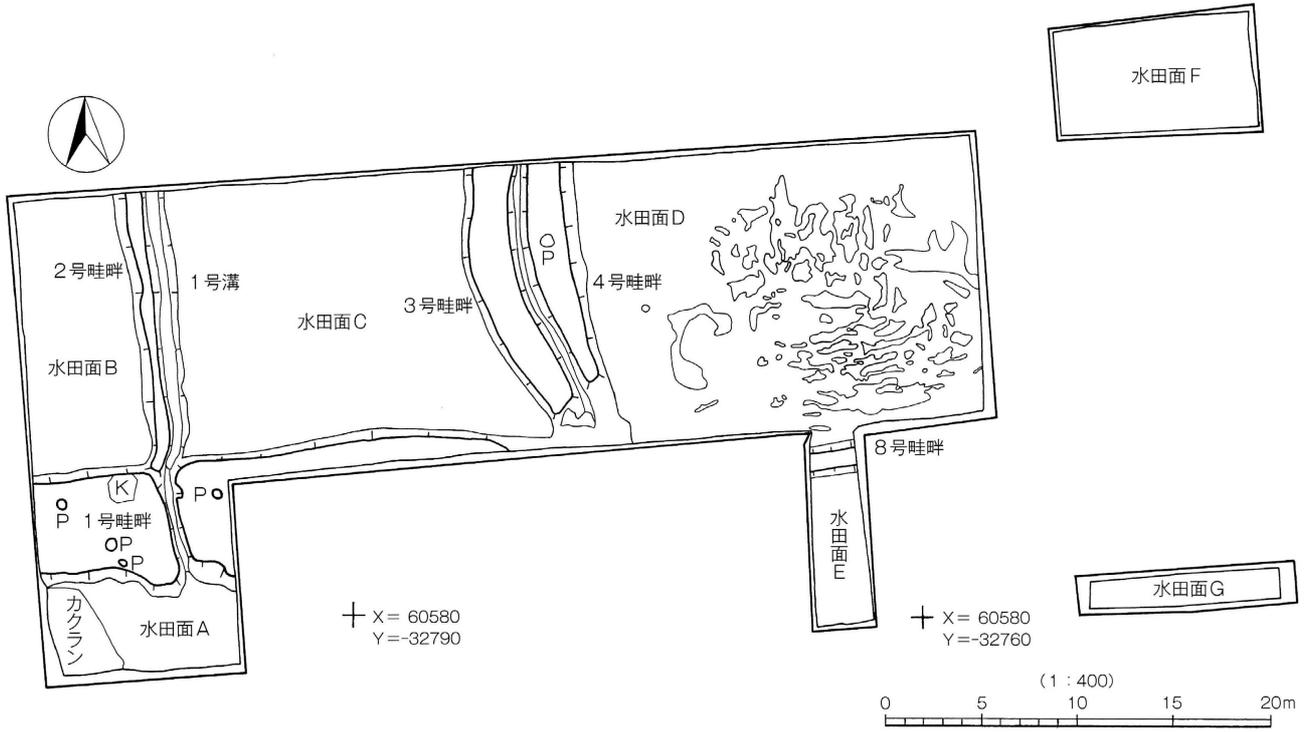
2号畦畔（第10・12図）

1号畦畔に直行して南北に縦走する畦畔であり、脇に1号溝が並走する。主軸は $N-7^{\circ}-W$ の方角である。溝跡内には、粘土塊が設置されていた。原型を崩してしまったものもあるが、原型は立方体状の形状を呈していたものと推察される。粘土塊を切断すると、小さな塊の粘土の塊が観察でき、小ブロックを集めて形を形成したことが理解できる。ブロックは、溝内の流路をぎりぎりに妨げるように意図的設置されていると考えられる。このことから、このブロック設置の意味は、水流を急激に流さず一定程度緩和し、また水量の水位も上げて増量し、水温を上げる役目を果たしていたのではないかと推察される。

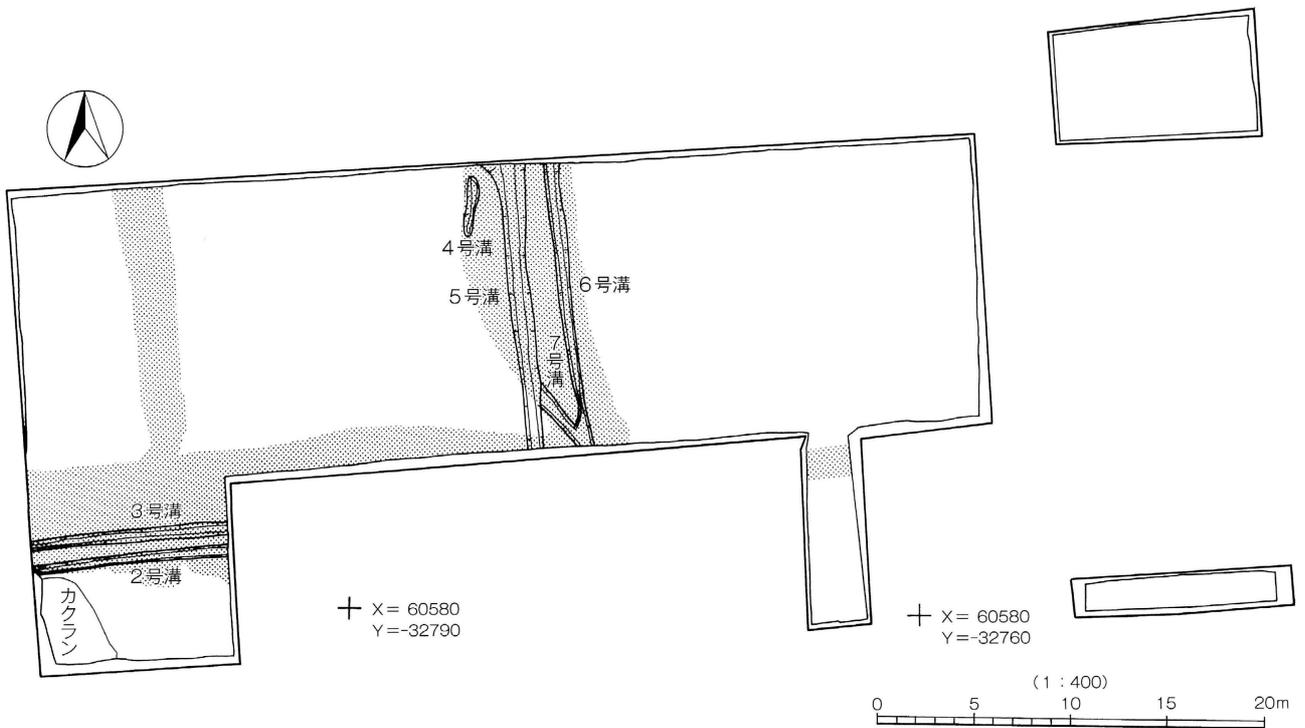
畦畔下には、黄味の強い水田床土が堆積しており、畦畔構築以前に一旦水田になっていたことが窺える。1号畦畔、3・4号畦畔の内部にあり、下位に溝が無く、一旦水田になっていたことを考慮すると、大畦畔内に新しく新設された畦畔ではないかと推察される。

3・4号畦畔（第10・11・14図）

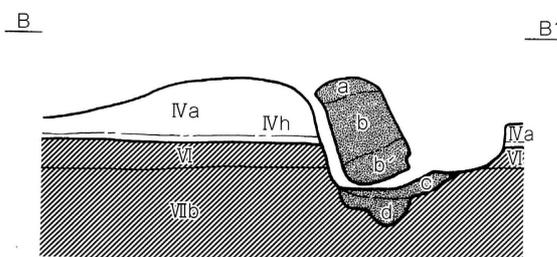
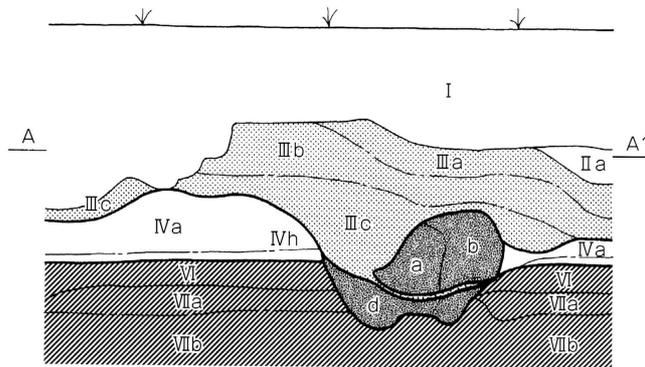
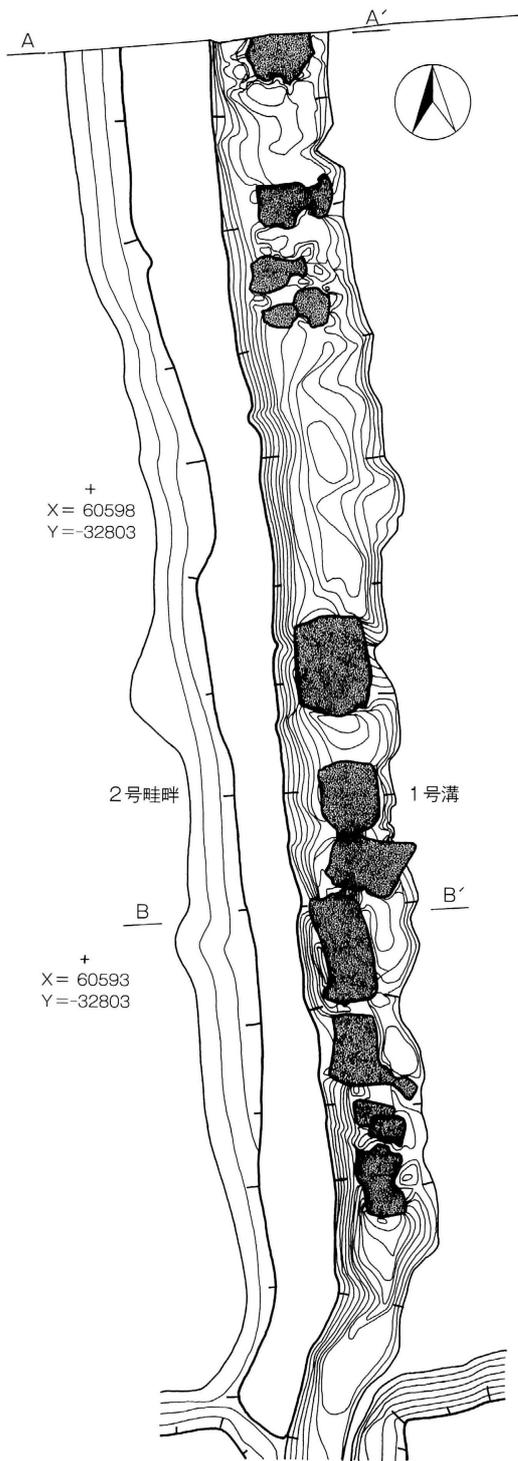
テニスコート地点中央を南北に弧を描きながら縦走する2条の畦畔である。一定の幅を持たず、三日月型の平面形を持つ。概ね南北を軸とするが、規格性は低い。調査区北端の付近では、西側に移行しはじめている様子が看取でき、西側に直行する畦畔と合流していることが推察される。畦畔下には4条の溝が検出されている。南北に延びる5・6号の2条の極めて規格性の高い溝が縦走している。両溝とも $N-7^{\circ}-W$ の主軸方位を持つ。溝内はカリカリになるほど鉄分が付着し硬化しており、長時間使用していたことが窺える。断面は非常にしっかりとした梯形をしており、あるいは板材等によ



第10図 テニスコート地点 平安時代水田面遺構実測図



第11図 テニスコート地点 平安時代水面下遺構実測図 (網点=平安時代水田面畦畔)

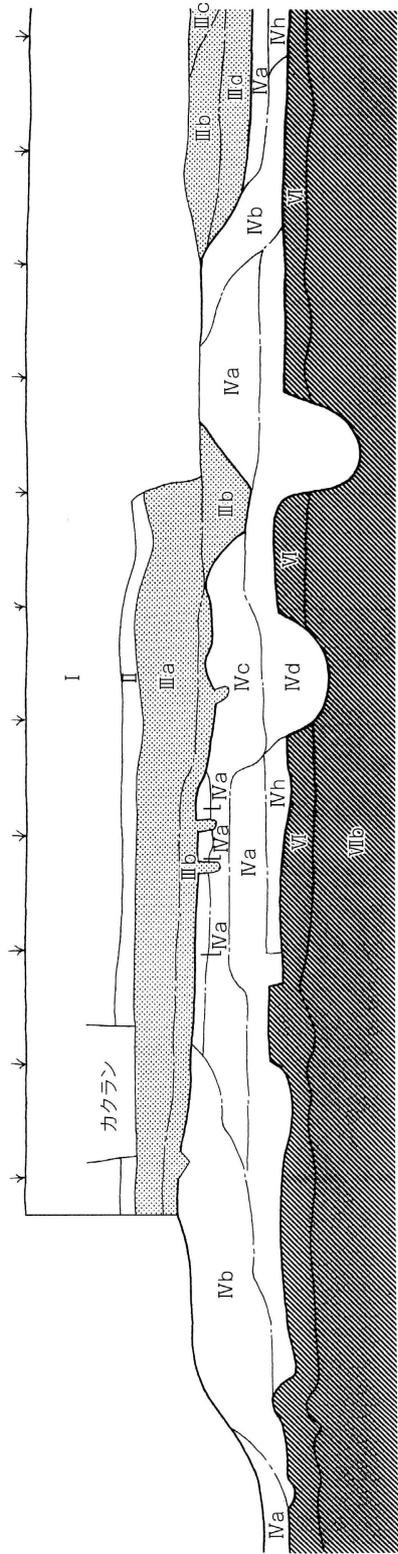


標高356.50m
 (1:40 断面図) 2m
 (1:80 平面図) 4m

- I層 造成土及び攪拌土層
 - II a層 7.5YR4/6褐色粘質土層、鉄分多含(現水田床土)
 - III a層 7.5YR4/3褐色砂層
 - III b層 7.5YR3/4暗褐色砂層、 $\phi 2\text{mm}$ 大の黒褐色土粒多含
 - III c層 10YR3/4暗褐色砂層
 - IV a層 10YR5/3にふい黄褐色粘土層(畦畔粘土)
 - IV h層 10YR4/6褐色粘土層(水田床土)
 - VI層 7.5YR4/2灰褐色粘質土層
 - VII a層 7.5YR4/4褐色粘質土層
 - VII b層 7.5YR4/3褐色粘質土層、 $\phi 10\text{mm}$ 大の炭化物含む
-
- a層 10YR4/3にふい黄褐色粘土ブロック土層
 - b層 10YR3/4暗褐色粘土ブロック土層
 - b'層 10YR4/4褐色粘土ブロック土層
 - c層 10YR5/2灰黄褐色粘土ブロック土層
 - d層 10YR5/3にふい黄褐色粘土ブロック土層

第12図 2号畦畔・1号溝跡実測図

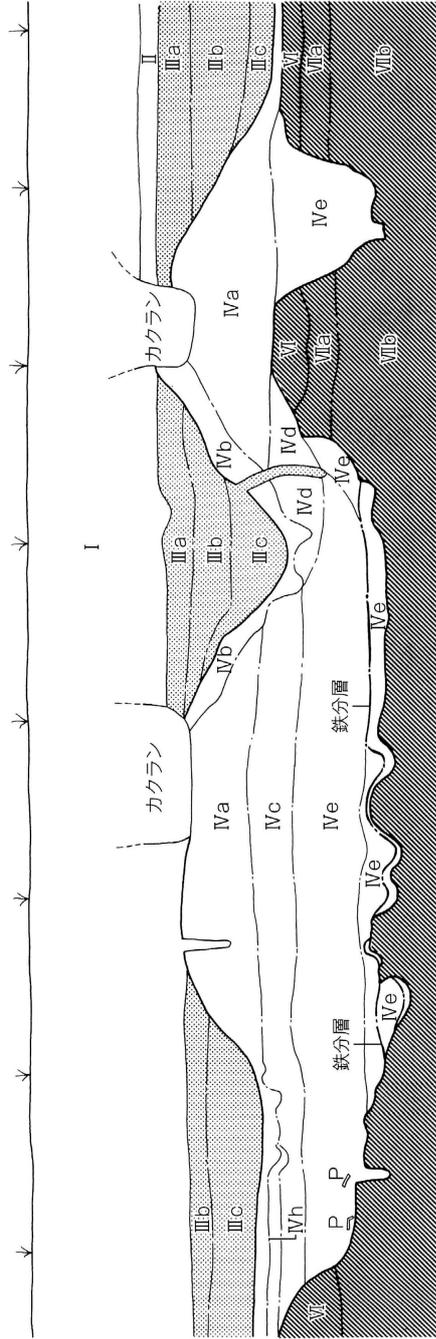
南



北

第13図 1号畦畔土層断面図

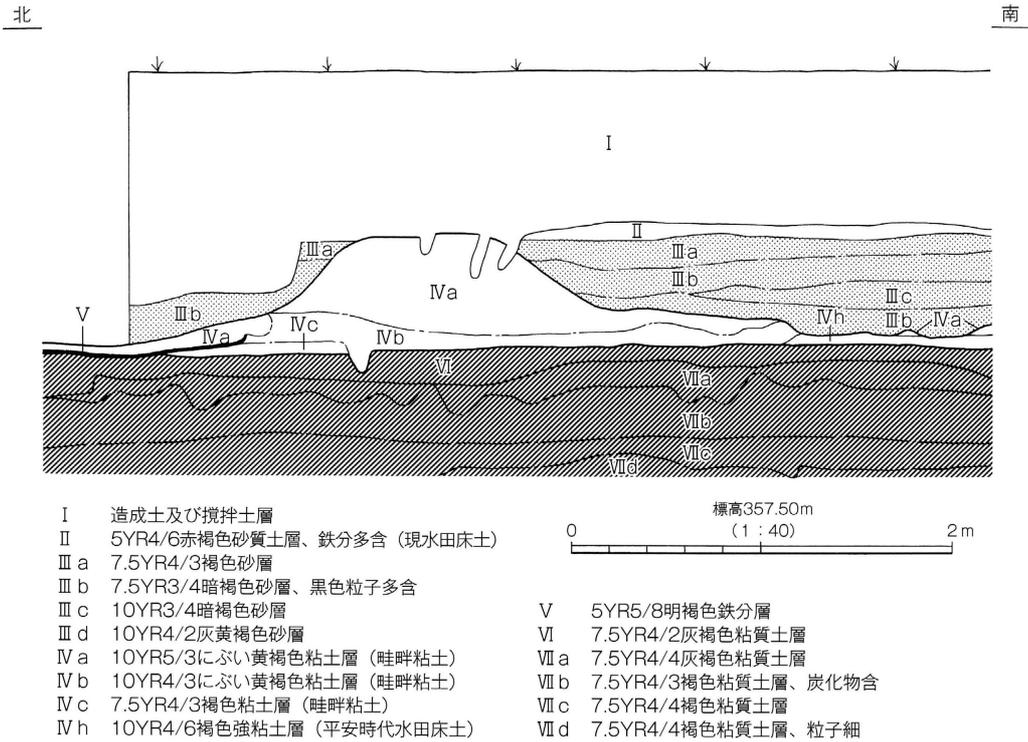
東



西

第14図 3・4号畦畔土層断面図

- I 造成土及び攪拌土層
- II 5YR4/6赤褐色砂質土層、鉄分多含 (旧水田床土)
- III a 7.5YR7褐色砂層
- III b 7.5YR3/4暗褐色砂層、黒色粒子多含
- III c 10YR3/4暗褐色砂層
- III d 10YR4/2灰黄褐色砂層
- IV a 10YR5/2灰黄褐色粘土層
- IV c 10YR4/3にぶい黄褐色粘土層
- IV d 10YR5/2にぶい黄褐色粘土層、 $\phi 10\text{mm}$ 大ブロック多含
- IV e 10YR4/2灰黄褐色粘土層、鉄分をまんべんなく含
- IV f 10YR4/2灰黄褐色粘土層、 $\phi 5\text{mm}$ 大の鉄分多含
- IV g 10YR4/2灰黄褐色粘土層、鉄分層をラミナ状に含
- IV h 10YR4/6褐色強粘土層 (平安時代水田床土)
- VI 7.5YR4/2灰褐色粘質土層
- VI a 7.5YR4/4灰褐色粘質土層
- VI b 7.5YR4/3褐色粘質土層、炭化物含



第15図 8号畦畔土層断面図（トレンチ東壁面）

る側壁の支えがあったことも推察される。

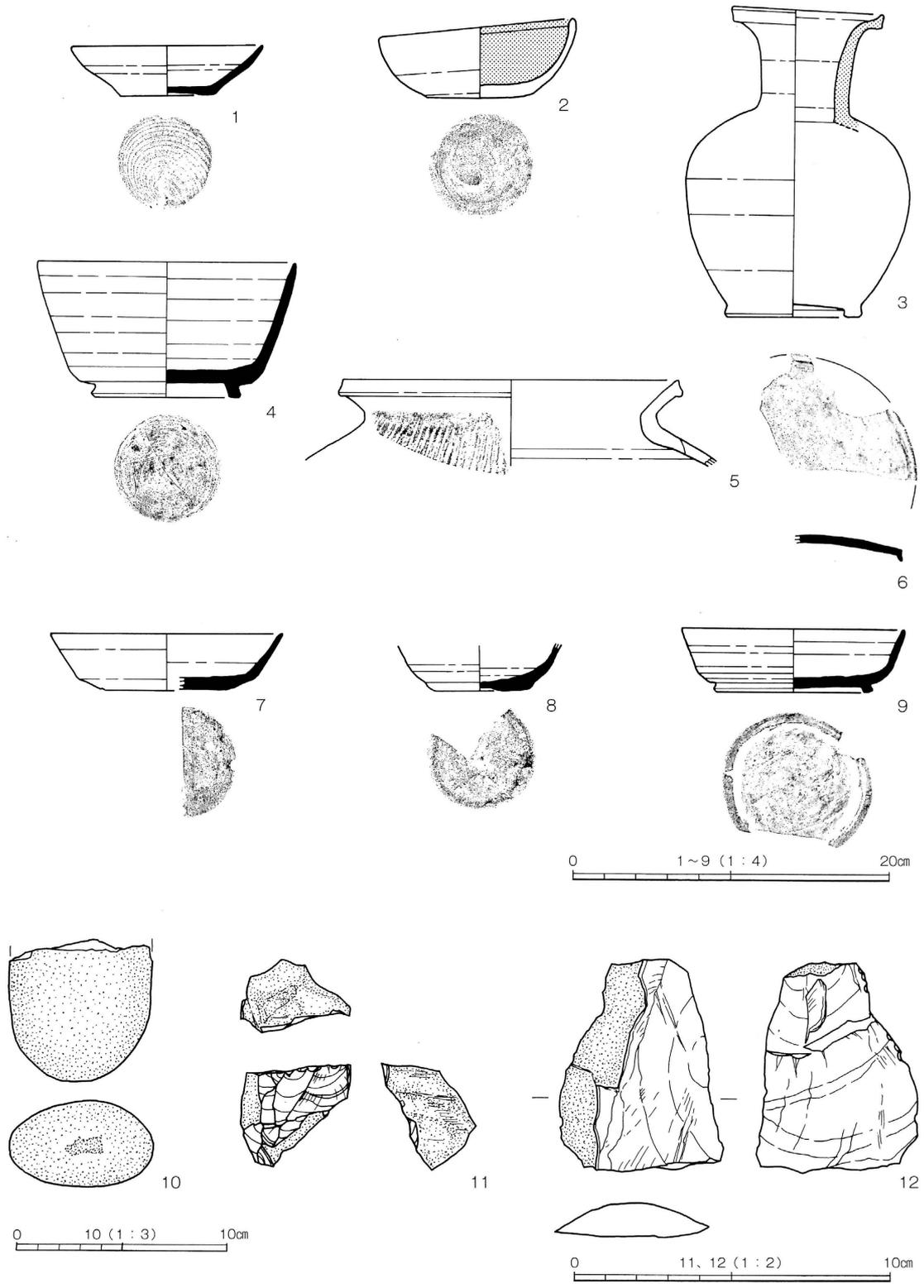
溝覆土、構築粘土内から比較的多数の須恵器片が出土している。完形資料は無く、すべてが破片資料であることから、混在したものと考えられる。

3. テニスコート地点出土遺物（第16図）

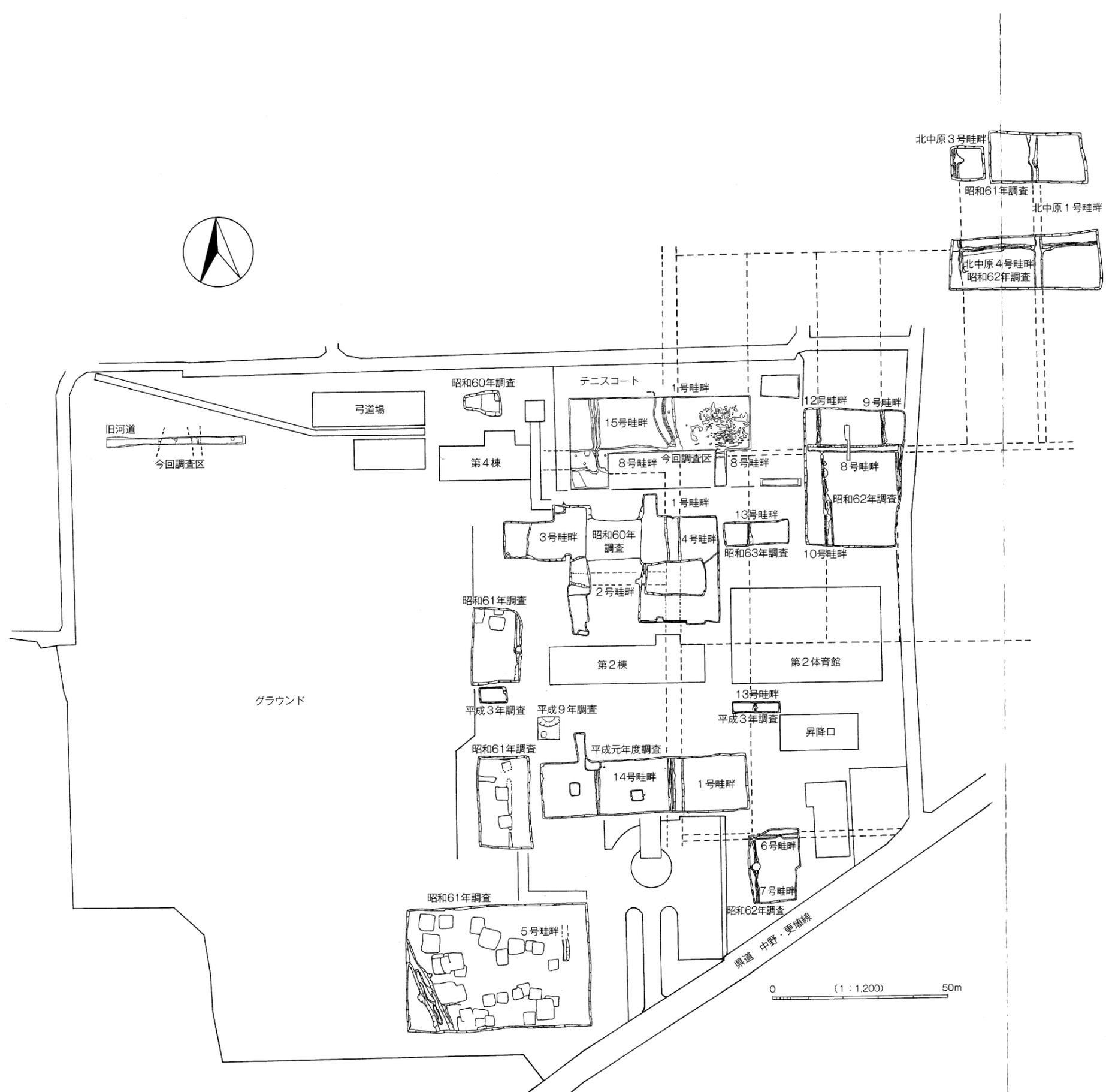
水田面からの遺物の出土は、非常に寡少であり、畦畔の構築材粘土の中にもほとんど混在することはない。しかしながら、畦畔下位に設置された溝内・構築粘土内からは、破片資料となるが比較的まとまって須恵器片が出土し、また、水田面出土の須恵器に比べヘラを用いた古い技法によって調整された須恵器が出土する傾向にある。

1は、1号畦畔検出面より出土した須恵器杯の破片資料である。2は1号畦畔調査区外との境界より出土した略完形の内黒土師器である。3は完形の灰釉陶器長頸壺である。1号畦畔上を縦走する1号溝内底面直上より出土している。釉薬を掛けており、火表はさらに釉薬の上に自然釉が掛かり少し発泡状態になっている。光ヶ丘窯型式である*。4・5は、1号畦畔下2号溝内からの出土であり、4には底裏面に窯記号がある。6・7は、5号溝からの出土である。8・9は、7号溝からの出土である。10は、1号畦畔3の近くより出土した安山岩製の礫器である。先端に凹部があり所謂叩き石と認識できる。11は、1号畦畔下より出土した黒耀石核である。透明度の高い質の良い石材である。12は、8号畦畔下、深掘トレンチ内より出土した頁岩製のフレイクである。11・12の石器が出土したことから、弥生時代以前にも人々の営みがあった可能性がある。

*長野県立歴史館 原明考古資料課長より御教示をいただいた。



第16図 テニスコート地点出土遺物実測図



第17図 馬口遺跡・北中原遺跡畦畔位置図

V 総括

今回の調査では、屋代高等学校の北側東端のテニスコート地点と西端のグラウンド地点の調査を実施した。グラウンドの西部では、住居跡・井戸跡等の遺構が検出され、テニスコート地点からは、水田跡が確認された。

このことから、遺跡西部の自然堤防上は住居等が営まれた居住・生活空間となっており、そこより東部域は水田耕作が行われた生産空間であり、古代の複合的空間構造が理解できた。また、居住域より僅か2m西側の地点より千曲川の旧河道が確認されており、河道の形成時期と居住時期との関係解明が今後の課題となる。

テニスコート地点は、灰褐色粘土に被覆された水田面が一面に検出された（第10図）。

1号畦畔上では、灰釉陶器長頸壺・内黒土師器坏の完形品が検出され、さらに、過去のプール建設の際には、緑釉陶器水注の完形品も出土している。水田面上には遺物の出土が寡少であることに比べ、特別な出土の在り方として捉えることができる。また、1号畦畔は幅6mと極めて幅広の特別な畦畔であり、単なる区画のための畦畔としての性格ではないことが理解できる。また、畦畔下に溝が製作されていることも特別な畦畔であることを裏付けている。

水田域に異例な完形品の出土状況、特別な畦畔であることを考慮すると、水田に関する特別な行為（祭祀）が行われた場所ではないかと推察される。

水田面は、畦畔で区画されたなかで各所状況が異なり、耕作跡の著しい面とそうでない面が確認された。以下水田面の状況について、各区画内水田ごとに概説する（第10図）。

水田面A・Cは水田面の凹凸が少なく、鉄分の堆積も殆ど確認できなかったので、使用頻度は少なかったと推察された。

水田面Bでは、三角錐状の凹部がランダムに無数に検出され、あるいは、牛の蹄の跡ではないかと推察された。しかしながら凹凸、筋状の痕跡は検出されず、あまり長い間使用された痕跡は窺えなかった。

水田面Dは、牛耕跡と推察される筋状の痕跡が検出されると共に鉄分の堆積している部分が広く検出され、頻度高く水田面として使用されていたことが窺えた。他の区画内では、水田面の高低は一定であるが、D水田面は緩やかに傾斜を持ち、北側部分が高くなっていた。

水田面E～Fも少し凹凸が確認され、鉄分堆積層が確認されていることから、比較的使用された水田面と推察される。

2・3号畦畔と5・6号畦畔は、ほぼ東西南北に90°で直交している。畦畔製作をする前に溝を設計・製作し、その上部に畦畔を造営、即ち、溝による条里区画の設計→溝の使用→畦畔造営の順で条里遺構が形成されたことが窺える。

2号・8号畦畔は、下部に溝が検出されなかった。畦畔下に溝を持つ畦畔は、古くより製作されており、その溝を基準に条里区画が設計されたと推察される。2号畦畔は、大区画内を分割する役割で製作されており、畦畔粘土下には、水田床土が確認され、一旦水田となっていたことが確認されている。

過去の調査より畦畔番号を整理すると、1号畦畔は、規模が異なるが8号畦畔（第17図）の延長線

上に位置する。3・4号畦畔と直交する地点より西側にかけて畦畔幅が巨大となるが、位置の関係から継続遺構番号を使用し、**8号畦畔**と認めることにする。

3・4号畦畔は、弧状を描き幅も一定ではないが、畦畔下の溝が南北の軸線にあり、その上部に造営することを意識したことも加味し、継続遺構番号を使用し、**1号畦畔**と認めたい。

2号畦畔（第12図）については、過去の調査で検出された畦畔の延長線上に相当する部分がないため、新たに**15号畦畔**と命名し、今後の調査のために整理をしておきたい。

今回の調査では、千曲川旧河道部・自然堤防上の住居跡・水田面が検出され、古代の生活空間の構造が把握されると共に、水田使用については、使用頻度に差があることが確認された。今後、令和4年（888）の洪水範囲及び千曲川旧河道の氾濫範囲と埋没時期、自然堤防上の居住地区が受けた影響についての調査が進展すれば、馬口遺跡における奈良時代から平安時代にかけての時代変遷的遺跡の空間構造が解明されることになると考えられる。今回の調査の調査結果が、その一助になれば幸いである。

最後になりましたが、本発掘調査実施にあたりご協力いただきました関係各位に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1978 『屋代馬口K』 屋代高等学校 更埴市教育委員会
- 1986 『馬口遺跡』 一長野県屋代高等学校改築に伴う発掘調査報告― 更埴市教育委員会 更埴市遺跡調査会
- 1987 『馬口遺跡Ⅱ』 一長野県屋代高等学校体育館等建設に伴う発掘調査― 更埴市教育委員会 更埴市遺跡調査会
- 1988 『馬口遺跡Ⅲ』 一長野県屋代高等学校プール等建設に伴う発掘調査報告書― 更埴市教育委員会 更埴市遺跡調査会
- 1989 『馬口遺跡Ⅳ』 一長野県屋代高等学校合宿所建設に伴う発掘調査報告書― 更埴市教育委員会 遺跡調査会
- 1991 『馬口遺跡Ⅴ』 一長野県屋代高等学校管理混合棟建設に伴う発掘調査報告書― 更埴市教育委員会
- 1992 『馬口遺跡Ⅵ』 一長野県屋代高等学校部室・倉庫建設に伴う発掘調査報告書― 更埴市教育委員会
- 1998 平成9年度『更埴市埋蔵文化財調査報告書』馬口遺跡 長野県更埴市教育委員会



馬口遺跡遠景 森將軍塚古墳より望む（中央白色建物右側）



馬口遺跡遠景 科野の里歴史公園より望む

PL2

グラウンド地点



▲グラウンド地点 トレンチ設定状況（西より）



▲1号住居跡 カマド掘り下げ状況



▲1号住居跡 カマド掘り方（東より）

▶ 1号住居跡完掘
状況（東より）



▲ トレンチ完掘状況（東より）

▶ 旧千曲川河道完掘
状況（東より）



PL4

テニスコート地点

▶水田面完掘状況
(西より)



▶1・2号畦畔
(南東より)



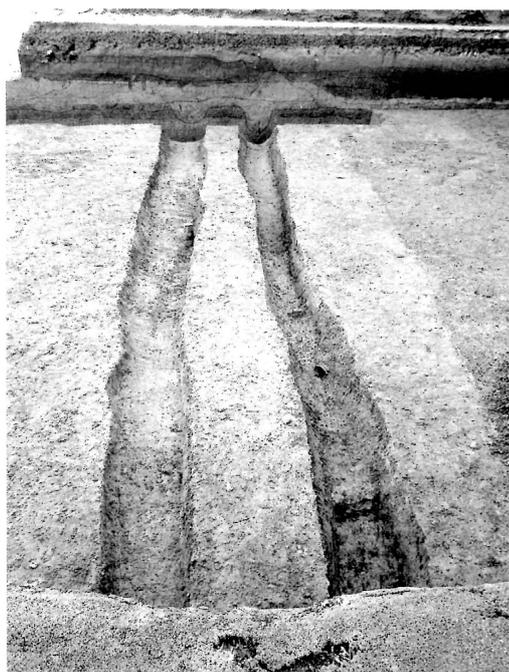
▶東部域完掘状況
(南西より)



▶ 1号畦畔及び
2号畦畔跡
(南より)



▲ 1号畦畔上灰釉陶器出土状況 (北より)



▲ 1号畦畔下2・3号溝跡出土状況 (西より)

PL6

▶ 2号畦畔出土
状況(南より)



▲ 1号溝跡内粘土ブロック出土状況



▲ 2号畦畔断面(南より)

▶ 3・4号畦畔跡出土状況（南より）



▶ 水田面牛耕跡検出状況（東より）



▶ 3・4号畦畔
（南より）



PL8

▶ 3・4号畦畔断面
(南より)



▶ 3・4号畦畔下
4～7号溝跡完掘
状況(北より)



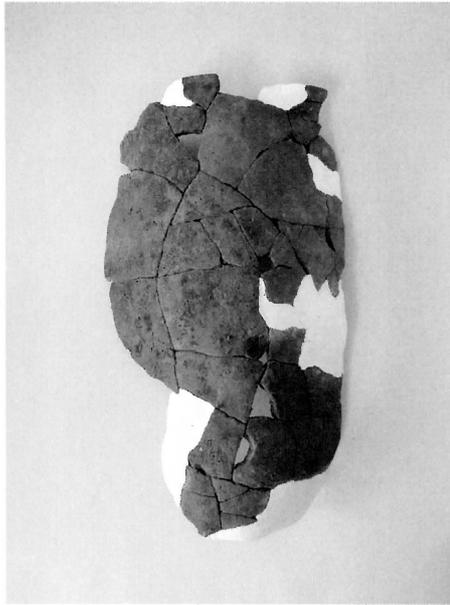
▲ 5号溝跡完掘状況(北より)



▲ 6号溝跡完掘状況(北より)

グラウンド地点

▶ 1号住居跡出土
土師器甕
(6-1)



▶▶ 支脚となつて
いた甕
(6-3)



▶ 甕
(6-5)



▶▶ 甕
(6-4)



▶ 甕内面
(上段同一)



▶▶ 1号溝跡出土
石器
(8-1)



PL 10

テニスコート地点



▲1号畦畔出土 灰釉陶器 (16-3)



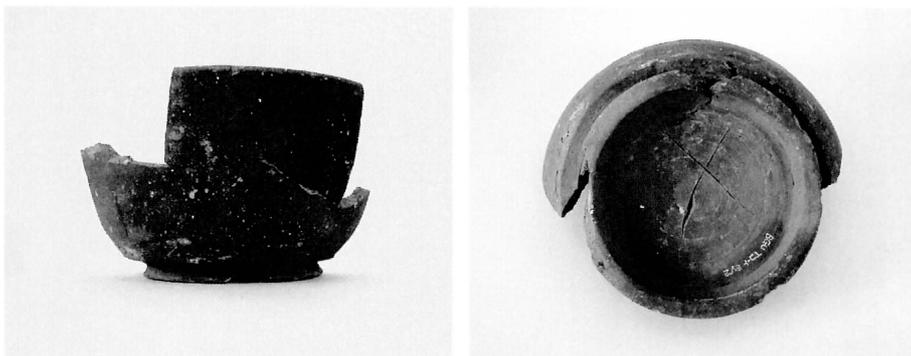
▲1号畦畔検出面出土 須恵器坏 (16-1)



▲1号畦畔出土 土師器坏 (16-2)

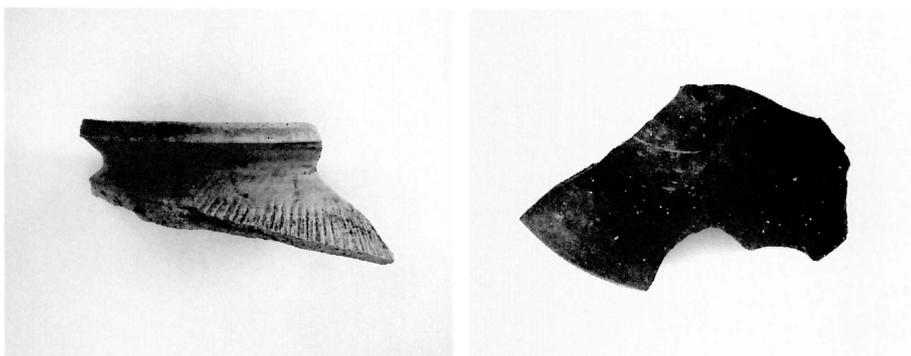
▶ 2号溝跡出土坏
(16-4)

▶▶ 同左裏面



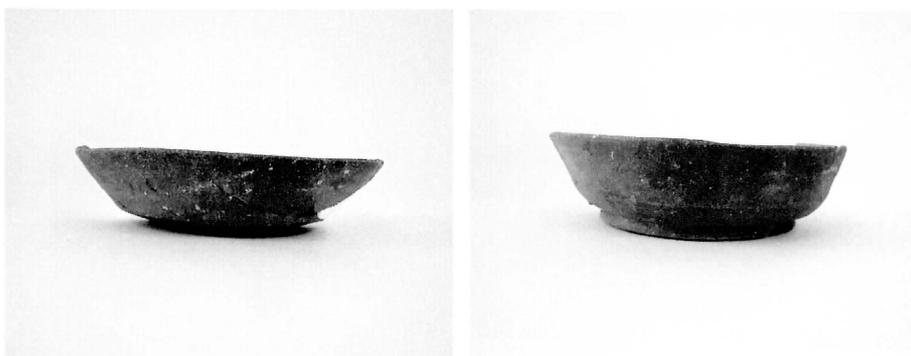
▶ 2号溝跡出土甕
(16-5)

▶▶ 2号溝跡出土
蓋 (16-6)



▶ 5号溝跡出土坏
(16-7)

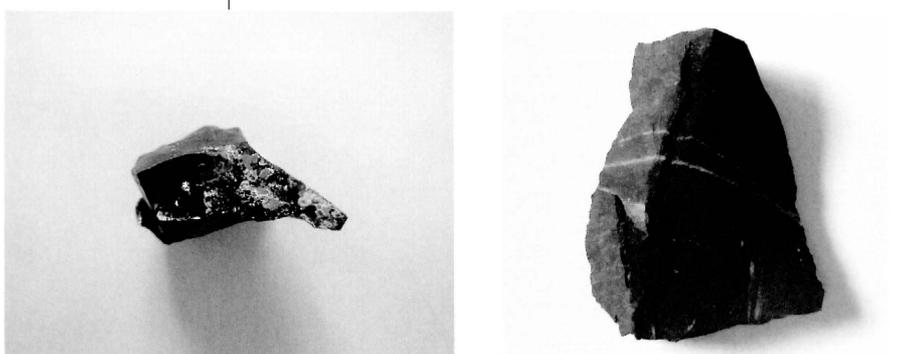
▶▶ 7号溝跡出土
坏 (16-9)



▶ 1号畦畔下出土
黒耀石石核
(16-11)



▶▶ 水田面下出土
フレイク
(16-12)



報告書抄録

ふりがな	やしらいせきぐん ばぐちいせき							
書名	屋代遺跡群 馬口遺跡							
副書名	埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	翠川泰弘							
編集機関	千曲市教育委員会生涯学習文化課文化財係							
所在地	〒389-0892 長野県千曲市大字戸倉2388番地 TEL 026-275-0004							
発行年月日	2012年3月30日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ばぐちいせき 馬口遺跡	ながのけんちくましおお 長野県千曲市大 あざやしろ ばんち 字屋代1000番地	20218	31-4	36° 32' 44"	138° 08' 09"	20101001 ～ 20101217	1200㎡	学校建設
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
馬口遺跡	集落跡	奈良時代 ～ 平安時代	住居跡 1棟 井戸跡 1基 畦畔跡 5条 溝跡 8条 水田跡 1面	土器・石器		平安時代の大畦畔・灰釉陶器完形品を検出		

屋代遺跡群 馬口遺跡 8

発行日 平成 24 年 3 月 30 日
 発行 千曲市教育委員会
 〒389-0892 長野県千曲市大字戸倉2388番地
 電話 (026)275-0004
 印刷 信毎書籍印刷株式会社
 〒381-0037 長野県長野市西和田一丁目30番3号
 電話 (026)243-2105
